

社会的養護を果たす保育士の役割の認知と 効力不安について

大 森 弘 子 ・ 太 田 仁

〔抄 録〕

本研究は、子どものいのちを最善の利益で保障するためのサポートシステム構築を目指すものである。具体的には保育士のキャリアパスで考案された保育士の専門性について、社会的養護を果たす児童養護施設保育士（以下：施設保育士）がどのように解釈しているのかを、施設保育士の養護に関する不安を柱にして分析を行った。その結果、施設保育士の効力不安は「社会的養護」、「保健衛生」、「子育て支援」、「食育」、「気になる子ども支援」の5つの概念により構成され、各要因には正の相関関係があることが明らかになった。保育士のキャリアパスで考案された保育所保育士の専門性と施設保育士の養護の専門性には、構造化の差異が存在することが示唆された。保育士の専門性が分化される中で、現状の子どもの社会的養護に應えるためには、保育所保育士の専門性と異なる施設保育士の専門性に関して構造化の必要性が示された。

キーワード：社会的養護，児童養護施設，施設保育士の専門性

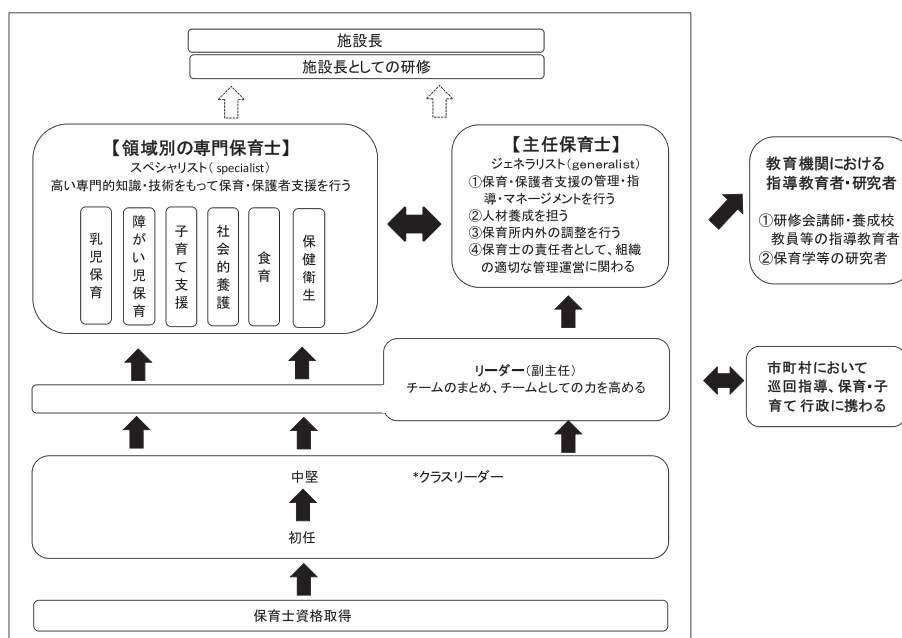
I. 問 題 と 目 的

社会的養護は「保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うこと」と定義（厚生労働省，2014）¹⁾されている。また、厚生労働省児童養護施設等の社会的養護の課題に関する検討委員会は社会的養護を「子どもの最善の利益のために」と「社会全体で子どもを育む」という理念を提起²⁾している。児童養護施設は児童指導員，嘱託医，保育士，個別対応職員，家庭支援専門相談員，栄養士及び調理員から構成されている（児童福祉施設最低基準第四十二条）。そして、現場では年々、深刻さを増す収容児童に関わる困難なケースへの処遇対応の必要性から質の高い職員の専門性が求められている。特に、近年の児童虐待の増加からも児童養護施設における保育士には、高い専門性と豊富な経験に支えられた実践力が求められる（田中，1980）³⁾（矢藤，2005）⁴⁾（大嶋，2008）⁵⁾（宮内，2008）⁶⁾。

現在、子どもの基本的人権を国際的に保障するために定められた「児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）」に日本が批准してから 20 年になる。社会全体で子どもを育むことを理念として、養護が必要な子どもを支援してきた人々は、長い時間をかけて子どもの最善の利益を社会化し、子どもの生活支援に社会的養護を果たす児童養護施設保育士（以下；施設保育士）の質の高い専門性を持って子どもの保育を実践してきた。

保育所保育士の専門性について、大森ら（2013）⁷⁾は「保育士の専門性を活性化させるためのキャリアパスのあり方」について精査し検討する必要性を考え、キャリアパスを実践する保育現場で調査を行った。その保育現場では「乳児保育」「障がい児保育」「子育て支援」「社会的養護」「食育」「保健衛生」領域の専門保育者がそれぞれの専門性を発揮し、質の高い保育を実践し、そこに学生は保育士の職務効力感を感じ保育士志向を高める現状を報告した。また、大森・太田（2013）⁸⁾は「保育士会が提唱する専門性の“社会的養護”“障がい児保育”“乳児保育”については、保護者の認識において“親子・家庭支援”“健康・発達支援”“食育（知育・徳育・体育）支援”に統合されている現状が明らかとなった。このことから、保育士の専門性が分化される中で現状の保護者の保育期待に応えるためには、チームとして援助することの必要性が示された。

民秋他（2008）⁹⁾が保育士のための自己評価チェックリストを作成し、保育所保育指針を基底にした保育所保育士の専門性を構造化している。しかしながら、施設保育士の専門性を構造



（全国保育士会「保育士のキャリアパスの構想に向けて」（2012）をもとに作成）

図1 保育士のキャリアパス

化した研究は見当たらない。また、「保育士養成校で受ける専門教育研修は就学未満児の養育に力点が置かれている(大嶋, 1990)¹⁰⁾。」と指摘されているように、保育士養成課程において養護施設の現場で求められる施設保育士の専門性の学びの不足が憂慮される。

そこで本研究では、「保育士会のキャリアパス構想(図1)」から尺度の内容を36項目に選別し、保育所保育士の専門性と施設保育士が求められる「保育士の専門性」を比較検討し、養護現場における若年保育士の専門性についての自己評価の現状を明らかにする。このことによって、今後、施設保育士に求められる「保育士の専門性」を理解する上で、非常に有益となることが期待される。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究デザイン

現職の施設保育士を対象としてアンケート調査法を用い、「保育士のキャリアパス」における6構成要因と施設保育士の専門性が一致するかを検証する仮説検証的研究である。

2. 調査対象者

小規模施設が多いA地域の4カ所の児童養護施設で働く施設保育士110名(男性21名, 女性89名)($M=33.67$ 歳, $SD=10.84$)であり、同意を得た施設保育士に対してアンケート調査を実施した。第一筆者又は児童養護施設長を通して、自記式調査用紙を施設保育士に配布した。後日、個別封筒に入れられた調査用紙を回収した。調査用紙の配布数は200人、回収数は110人で回収率は55.0%であった。

調査時期は2013年2月～2013年3月であった。施設がある地域は、大都市へのアクセスが良い地方都市で、神社仏閣や古い町並みが多数存在し、多くの学生や研究者が集まる学園都市でもある。

3. 調査内容

基本的属性は、性別、年齢、子どもの数、同居者、雇用形態、最終学歴、ITに使う時間、趣味に使う時間であり、育児ストレスを測定する質問紙に関する先行研究の中から手島・原口(2003)¹¹⁾の「育児不安」8項目からなる尺度を用い、「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの5件法で回答を求めた。

また、第一筆者、第二筆者と保育士経験25年の研究協力保育士の3人が「保育士のキャリアパス」から「保育士の専門性」尺度の内容を36項目に選別し、養護に関する不安について「不安でない」から「非常に不安である」までの5件法で評定を求めた。

4. 倫理的配慮

本研究は、佛教大学「人を対象とする研究計画等審査」倫理審査委員の承認（H24-44）を受けて実施した。

Ⅲ. 結 果

1. 施設保育士の専門性構成要因の分析

調査対象の保育者 110 名（男性 21 名，女性 89 名）（ $M=33.67$ 歳， $SD=10.84$ ）に対して施設保育士の専門性尺度の不安度を“1 非常に不安である”から“5 不安ではない”までの 5 項目で回答することを求めた。まず，保育者の専門性尺度 36 項目の平均値，標準偏差を算出し表 1 に示した。職員の専門性不安評定において以下の 2 項目が 3.74 以上の平均評定の高得点で養護に関する不安が低かった。

「19 子どもに対する十分な愛情表現をすること（3.78）」

「11 子どもの喜怒哀楽に共感できること（3.74）」。

一方，職員の専門性不安評定において以下の 3 項目が 2.75 以下で平均評定の低得点で養護に関する不安が高かった。

「16 子育てについて社会に発信できる（2.69）」

「17 子育て文化を継承する支援ができること（2.75）」

「31 関係機関と連携を図り，コーディネートする役割を果たすこと（2.75）」。

2. 保育士の専門性構成要因の分析

保育士の専門性の構成要因の分析で，天井効果等が見られた 9 項目（Q5, Q6, Q7, Q18, Q20, Q22, Q24, Q30, Q35）を以降の分析から排除した。固有値の変化から 5 因子が妥当であると考えられた。そして再度 5 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 2 に示す。

第Ⅰ因子は 8 項目で構成されており，「家庭訪問」「家庭形成」「虐待」など，家庭に意識が向かう内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで“社会的養護”と命名した。

第Ⅱ因子は 7 項目で構成されており，「安心・安全」「安全・衛生」などが高い負荷量を示していた。そこで“保健衛生”と命名した。

第Ⅲ因子は 3 項目で構成されており，「子育て」「地域の親子」などが高い負荷量を示していた。そこで“子育て支援”と命名した。

第Ⅳ因子は 5 項目で構成されており，「毎日の食事」「栄養指導」などが高い負荷量を示していた。そこで“食育”と命名した。

第Ⅴ因子は 4 項目で構成されており，「共感」「個性」「気になる子ども」などが高い負荷量

表1 保育者の専門性 項目得点平均・分散

no 質問項目	n	min	max	mean	SD
19 子どもに対する十分な愛情表現をすること	110	1	5	3.78	.971
11 子どもの喜怒哀楽に共感できること	110	1	5	3.74	.864
1 子どもの毎日の食事の様子を把握すること	110	1	5	3.66	1.111
3 子どもの食事に気を配った保育や栄養指導を行うこと	110	1	5	3.65	1.010
26 子どもの発育に大切な食体験を援助できること	110	1	5	3.64	.926
8 子どもの成長に従って発達を援助できること	110	1	5	3.48	1.038
12 オムツの替え方の正しい保育の仕方が理解できていること	110	1	5	3.46	1.123
5 発達に合わせた離乳食の提供ができ、卒乳へと移行の援助ができること	110	1	5	3.41	1.007
4 子どもの健康・衛生に関する情報を収集していること	110	1	5	3.36	.984
18 子どもの健康状態、発育、発達状態、栄養状態、食生活の状況を把握し、適切な指導を行うことができること	110	1	5	3.35	1.010
22 積極的に関係機関との連携を持つことができること	110	1	5	3.35	1.053
29 保護者の子育てに関して共感する力があること	110	1	5	3.34	.805
23 子どもをけがや感染から守るための安全・衛生に関する知識や技術があること	110	1	5	3.28	.920
24 子どもが社会との関わりの中で生きていけるように援助ができること	110	1	5	3.28	.987
36 子どもの病気やけがについての的確で迅速な対応ができること	110	1	5	3.27	.995
14 寝かせつけ方の正しい保育の仕方が理解できていること	110	1	5	3.24	1.013
10 一人ひとりの子どもの個性に応じた援助ができること	110	1	5	3.20	1.099
2 子どもの発達に合わせた玩具が提供できること	110	1	5	3.15	1.099
21 全ての子どもの発達過程に即した健康で安心・安全な生活を育むための環境整備・感染症予防の知識があること	110	1	5	3.14	.962
7 他の関係機関とケース検討会議等を通して連携が取れていること	110	1	5	3.12	1.171
33 保護者の子育てを支援できること	110	1	5	3.11	.902
27 子どもを含む家族全員が健康な家庭生活の支援ができること	110	1	5	3.05	.897
25 不適切な子育てを早期に発見し保護者支援ができること	110	1	5	3.02	.867
34 家庭への訪問や面接を行いながら、親との信頼関係を深めることができること	110	1	5	2.98	.958
32 虐待を見抜くこと	110	1	5	2.97	.862
9 発達の気になる子どもや障がいがある子どもへの正しい理解と判断ができること	110	1	5	2.93	1.106
35 地震や災害などの緊急時の対応ができること	110	1	5	2.89	.999
6 保護者と協働しながら、子どもの発達を援助することができること	110	1	5	2.88	.965
28 生きる意欲を支える家庭形成に向けての助言ができること	110	1	5	2.88	.974
15 地域の親子に安心して遊んでもらえる遊び場を提供することができること	110	1	5	2.86	.923
20 利用できる社会制度やサービスを知っていること	110	1	5	2.85	1.030
13 パニック時の対応力と判断力があること	110	1	5	2.84	1.000
30 保護者の栄養指導や相談援助ができること	110	1	5	2.76	.888
31 関係機関との連携を図り、コーディネートする役割を果たすこと	110	1	5	2.75	.903
17 子育て文化を継承する支援ができること	110	1	5	2.75	.933
16 子育てについて社会に発信できること	110	1	5	2.69	1.020

を示していた。そこで“気になる子ども支援”と命名した。

表2 保育士の専門性の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

項目内容	社会的 養護 $\alpha=.81$	保健 衛生 $\alpha=.74$	子育て 支援 $\alpha=.81$	食育 $\alpha=.69$	気になる 子どもの 支援 $\alpha=.66$
第Ⅰ因子：社会的養護					
Q4-34 家庭への訪問や面接を行いながら、親と信頼関係を深める事ができること	.84	-.09	.04	-.04	-.04
Q4-33 保護者の子育てを支援できること	.80	-.07	-.10	.02	.07
Q4-28 生きる意欲を支える家庭形成に向けての助言ができること	.68	.14	.07	-.13	.13
Q4-29 保護者の子育てに関して共感する力があること	.67	-.26	-.16	.15	.31
Q4-27 子どもを含む家族全員が健康な家庭生活の支援ができること	.58	.16	.10	.10	-.10
Q4-31 関係機関との連携を図り、コーディネートする役割を果たすこと	.57	.08	.36	-.07	-.12
Q4-25 不適切な子育てを早期に発見し保護者支援ができること	.46	.35	.08	.14	-.11
Q4-32 虐待を見抜くこと	.42	.36	-.04	-.05	.06
第Ⅱ因子：保健衛生					
Q4-21 全ての子どもの発達過程に即した健康で安心・安全な生活を育むための環境設備・感染症予防の知識があること	-.08	.82	.20	-.05	-.19
Q4-23 子どもをけがや感染から守るための安全・衛生に関する知識や技術があること	-.04	.79	.09	.03	-.08
Q4-36 子どもの病気やけがについての的確で迅速な対応ができること	-.08	.78	-.21	-.02	.13
Q4-12 オムツの替え方の正しい保育の仕方（方法）が理解できていること	-.02	.54	-.36	-.07	.31
Q4-13 パニック時の対応力と判断力があること	.02	.52	.21	-.23	.18
Q4-9 発達の気になる子どもや障がいのある子どもへの正しい理解と判断ができること	-.09	.45	.21	.08	.22
Q4-14 寝かせつけ方の正しい保育の仕方（方法）が理解できていること	-.06	.45	-.07	.13	.35
第Ⅲ因子：子育て支援					
Q4-16 子育てについて社会に発信できること	.01	.20	.97	.02	-.10
Q4-17 子育て文化を伝承する支援ができること	-.09	-.06	.72	.00	.08
Q4-15 地域の親子に安心して遊んでもらえる遊びの場を提供することができること	-.04	.14	.62	.05	-.07
第Ⅳ因子：食育					
Q4-1 子どもの毎日の食事の様子を把握すること	.00	-.18	-.03	.91	.09
Q4-3 子どもの食事の配った保育や栄養指導を行うこと	.04	.12	.02	.84	-.29
Q4-2 子どもの発達に合わせた玩具が提供できること	-.06	-.15	.21	.53	.15
Q4-4 子どもの健康・衛生に関する情報を収集していること	-.01	.38	-.10	.44	.04
Q4-26 子どもの発育に大切な食体験を援助できること	.13	.33	-.06	.42	.02
第Ⅴ因子：気になる子どもの支援					
Q4-11 子どもの喜怒哀楽に共感できること	.06	-.01	.03	-.08	.86
Q4-19 子どもに対する十分な愛情表現をすること	.16	.04	.09	-.07	.64
Q4-10 一人ひとりの子どもの個性に応じた援助ができること	-.13	.13	.31	.19	.50
Q4-8 子どもの成長に従って発達を援助できること	-.04	.23	.26	.11	.45
因子相関行列	1	2	3	4	5
1	—	.60	.52	.42	.42
2		—	.62	.61	.52
3			—	.55	.47
4				—	.49
5					—

Ⅳ. 考 察

1. 社会的養護を果たす保育士の専門性構成要因

平成25年10月1日現在、児童養護施設数は595カ所、定員34,044人、現員28,831人、職員総数15,575（厚生労働省、2013）¹²⁾であり、児童虐待の増加と児童虐待防止対策の強化とともに、社会的養護を必要とする子どもを受入れる児童養護施設の施設保育士の質の拡充が求められている。

全国保育士会「保育士のキャリアパスの構想」6因子（“乳児保育”“障がい児保育”“子育て支援”“社会的養護”“食育”“保健衛生”）に対応する項目により作成された質問紙であったが、施設保育士の専門性は“社会的養護”“保健衛生”“子育て支援”“食育”“気になる子ども支援”の5因子であった。まず、保育士の専門性の第Ⅰ因子が“社会的養護”であり、本調査対象の施設保育士は、施設保育士の専門性に「社会的養護」を第一に期待し、「社会的養護」が必要な親子への支援を施設保育士自らも認識していることがうかがえた。また、児童養護施設の施設保育士を対象としたため“乳児保育”が“保健衛生”に統合されたといえよう。さらに、因子の構成要因においても保育士会のキャリアパス構想が認知する保育士の専門性とのズレが明らかになった。特に保育士のキャリアパスと顕著に違いがあるのが、第Ⅴ因子の“気になる子ども支援”である。保育士の専門性について、子どもの喜怒哀楽に共感し、一人ひとりの子どもの十分な愛情を注ぎ、個性に応じた援助と発達や障がいのある子どもへの正しい理解と判断が求められていることを示している。

2. 施設保育士の効力不安と役割の認知

西山（2006）¹³⁾や朝木・鈴木（2009）¹⁴⁾は、保育者効力感を「子どもの人とかかわる力の育ちに変化を与えることができるという保育者の信念や実現可能性の認知」と定義している。これを基に施設保育士の効力不安を「子どもの人とかかわる力の育ちに望ましい変化を与えることができないという施設保育士の実現不可能性の認知」と本稿で定義した。Bandura（1977）¹⁵⁾は、この効力感の変動には、①成功体験を持つ事、②他者の行動を観察すること、③他者からの言語の説得、④心理状態の4つの情報源がかかわるとしている。しかしながら、施設保育士が実感ある成功体験を持つための結果はすぐに可視化できず、子どもの成長という時間が必要である。また、多忙な施設保育士が他の施設保育士を十分に観察して見習う機会も少ない。これらのことから、施設保育士の効力不安は高まるであろうが、成功体験や他の保育士との学び合いの機会を持つことで効力不安が軽減されと考えられる。

本稿で示された施設保育士の専門性（“社会的養護”“保健衛生”“子育て支援”“食育”“気になる子ども支援”）の5因子の一つひとつを施設保育士がスキルに応じて役割分担を行い、困難な課題を整理し、施設保育士というチームで円滑に子どもの支援に当たることができるよ

うなシステムが必要であろう。

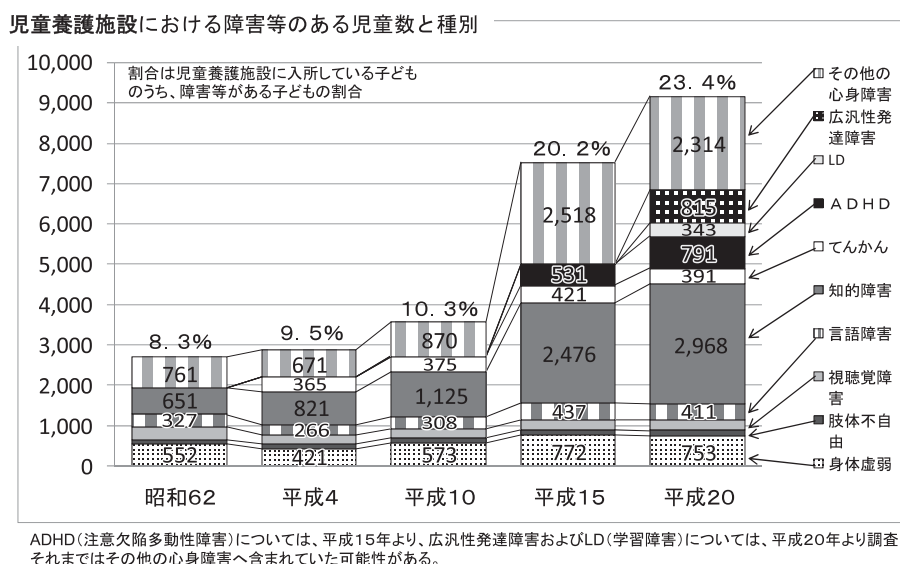
施設保育士は子どもを養護する中で、「子育て文化の発信や伝承」、「他機関との連携」に高い効力不安を感じており、地域社会の協力を得難い環境の中で仕事を抱え込んでいると言える。この効力不安を抱えて悩む施設保育士は後を絶たない。子どもの命と笑顔が育まれるため、主たる養育者である施設保育士の間でも「施設保育士の専門性」を再構築することが重要と言えるだろう。この施設保育士の専門性を向上させるためには、施設保育士をはじめとする職員とそのチームワーク、地域社会の支えが重要であることが示されているといえよう。

3. 気になる子ども支援の拡充

全国の児童相談所における児童虐待に関する相談件数は、児童虐待防止法施行前の2009年度に比べ、2012年度には約6倍に増加¹⁶⁾している。その中でも注目すべき点は、児童養護施設における障がい児の増加(図2)である。

高田ら(2010)¹⁷⁾の調査によると、公立保育所の通う気になる子どもの割合は3歳児12.6%、4歳児9.9%、5歳児8.9%であった。それに比べて、児童養護施設の入所児童の約23.4%¹⁸⁾が障害有りという。

このような障がい児をはじめとする気になる子どもが適切な養護を受けるためには、専門性のある職員の増員と質の向上等、現在ある施設での支援をより一層強固なものにしていくこと、他職種との連携、地域での協力が必要になる。



(厚生労働省家庭福祉課：福祉行政報告(2013))

図2 児童養護施設における障害等のある児童数と種別

V. 結 論

児童養護施設4カ所の施設保育士110人に保育士の専門性に関する調査を行った結果、保育士のキャリアパスで考案された保育士の専門性と施設保育士の専門性には、構造化の差異が存在することが示唆された。施設保育士の専門性は“社会的養護”“保健衛生”“子育て支援”“食育”“気になる子ども支援”の5因子であった。その中でも施設保育士の専門性に社会的養護を期待していることが有意に高く、“気になる子ども支援”について施設保育士は子育て文化の発信や伝承、他機関との連携に高い養護に関する効力不安を感じており、地域の協力を得難い環境の中で仕事を抱え込んでいると言える。

施設保育士の専門性について、今後さらなる情報収集を進めて継続的に研究を行い、施設保育士が養護に関する不安を軽減し、自信を持って仕事を継続できるように専門性を可視化していく必要がある。

子どもが地域で健やかに育つ社会を築くため支援体制を確保していくことが大切であり、人は人によって幸せになれるのだと感じる。

[注]

- 1) 厚生労働省 (2014)
(http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/syakaiteki_yougo/
最終アクセス日 2014 年 10 月 14 日)
- 2) 厚生労働省 (2012)「社会的養護の課題と将来像」『児童養護施設等の社会的養護の課題に関する検討委員会・社会保障審議会児童部会社会的養護専門委員会とりまとめ』, 3-4.
- 3) 田中未来他 (1983)『保育と専門性』第一法規, 253.
- 4) 矢藤誠慈郎他 (2005)「保育士の資質・力量における養成校への期待役割——保育士調査から」『保育士養成研究』23 号, 67-74.
- 5) 大嶋恭二 (2008)「保育士の専門性と養成の課題」『東洋英和大学院紀要』No.4, 3.
- 6) 宮内克代 (2008)「保育士の専門性を構成する要因の検討」『埼玉学園大学紀要』8, 91-98.
- 7) 大森弘子・油谷幸代・大和正克・太田 仁 (2013)「保育士の専門性を活性化するキャリアパスの構想に向けて」『保育士養成研究』第 30 号, 31-40.
- 8) 大森弘子・太田 仁 (2013)「保育士と母親の親役割認知の比較検討」『佛教大学社会福祉学部論集』第 9 号, 27-39.
- 9) 民秋言他 (2008)『保育士のための自己評価チェックリスト』萌文書林, 1-46.
- 10) 大嶋恭二 (2009)「保育サービスの質に関する調査研究 平成 18・19・20 年度」『厚生労働省科学研究補助金政策科学総合研究事業』論文初頁-終頁.
- 11) 手島聖子・原口雅浩 (2003)「乳幼児健康診査を通じた育児支援：育児ストレス尺度の開発」『福岡県立大学看護学部紀要』1, 15-27.
- 12) 厚生労働省 (2013)「福祉行政報告」『家庭福祉課』
(http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/dl/yougo_genjou_01.pdf/ 最終アクセス日 2014 年 10 月 14 日)

社会的養護を果たす保育士の役割の認知と効力不安について（大森弘子・太田 仁）

- 13) 西山 修（2006）「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成」『保育学研究』第44巻第2号，150-160.
- 14) 朝木 徹・鈴木由美（2009）「子どもの人間関係を育む保育実践の要因——保育者効力感と子ども感の関連について——」『聖徳大学児童学研究紀要第』11号，109-119.
- 15) Albert Bandura (1977) Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change, Psychological Review, Vol. 84, No. 2. 191-215.
前掲13)，159.
- 16) 前掲12)
- 17) 高田 哲・石岡由紀(2010)「発達障害をもつ児童に対する医療と保育所・幼稚園・学校との連携」『小児内科』第42号，491-495.
- 18) 前掲12)

【参考文献】

- McFarlane, W. (1983) Family Therapy in Schizophrenia, New York Guilford Press.
- Minuchin, S. (1974) Families and family therapy, Harvard U Press.
- 手島聖子他（2003）「乳幼児健康診査を通した育児支援：育児ストレス尺度の開発」『福岡県立大学看護学部紀要』1, 15-27.
- 牧野カツコ（1982）「乳幼児を持つ母親の生活と育児不安」『家庭教育研究所紀要』3
- 小川博久（2011）「保育の専門性」『保育学研究』第49号，100-110.
- 大宮勇雄（2006）『保育の質を高める——21世紀の保育観・保育条件・専門性——』ひとなる書房
- 太田 仁（2010）「親の援助要請態度に関する実証的・実践的研究」『関西大学社会学部紀要』42巻，27-47.
- Peter Breggin. (1997) The Heart of Being Helpful: Empathy and the Creation of a Healing Presence NY, Springer Publishing Company.
- 徳岡博巳他（2012）『社会的養護』あいり出版

【謝辞】

本研究を進めるにあたり，児童養護施設 施設長はじめ施設保育士や職員の方々に快く調査のご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

【付記】

1. 本研究の一部は，全国保育士養成協議会第53回研究大会においてポスター発表した内容に加筆・修正を加えたものである。
2. 本稿は文部科学省科学研究費補助金の交付を受けた研究（平成24～26年度基盤研究(C) 研究課題番号：24530757 研究代表者：大森弘子）に基づく研究成果の一部をまとめたものである。

（おおもり ひろこ 福祉教育開発センター）
（おおた じん 梅花女子大学）
2014年10月28日受理